

2017年8月20日 BMCN 研究会 ポスター発表要旨

DLA (外国人児童生徒のための J S L 対話型アセスメント) とは? --入門編--

小林幸江 菅長理恵

## ○背景

外国につながる児童生徒の増加に伴い、文部科学省は H22~24 年度に「外国人児童生徒の総合的な学習支援事業」として情報検索サイト「かすたねっと」を開設したほか、(1)『外国人児童生徒受け入れの手引き』、(2)『外国人児童生徒のための JLC 対話型アセスメント DLA』[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm)、(3)『外国人児童生徒教育研修マニュアル』を作成・配布した。また、平成 26 年 4 月からは日本語の能力に応じた特別の指導を正規の授業と位置付ける「特別の教育課程」が施行された。義務教育課程において日本語指導の必要性が見直され、児童生徒の実態の把握が求められている。

DLA は、児童生徒の実態把握の一助となることを企図して作成された評価ツールであり、外国人児童生徒等に対する日本語指導のための指導者の養成を目的とした研修においても採り入れられているが、未だ普及の途上にある。

本ポスター発表では、DLA の基本的な考え方と目的、構造と使い方について概要を紹介する。併せて、東京外国語大学で作成した「使い方映像マニュアル」を紹介し、DLA の活用を促したい。

## 1) DLA (外国人児童生徒のための J S L 対話型アセスメント) とは?

DLA は、紙筆テストでは測れない文化的・言語的に多様な背景を持つ年少者の言語能力を対話を通して測る支援付きの評価法である。

## 2) 基本的な考え方

CLD 児(=文化的・言語的に多様な背景を持つ年少者)の言語能力の伸び方を理解するためには、母語、年齢と併せて、滞日年数、入国年齢、学習経験にも注目する必要がある。また、CLD 児の持つ多様性を貴重な言語資源であると肯定的に捉え、認め、励ますことにより、自尊感情を育て、児童生徒の言語力を総体として伸ばしていこうと考える。

Cummins の言語習得理論によれば、年少者の言語力は、3面に分けて捉える必要がある。CF：会話の流暢度、DLS：弁別的言語技能、ALP：学習言語能力、の3つである。

このうち、CF は最も早く伸び、ほとんどの児童生徒が 2 年ほどで日常生活のやりとりができるようになる。DLS は文字習得など、個別に身につけていくもので、技能や年齢によって習得に要する時間が異なる。ALP は、学習に必須の能力であるが、伸びるのに最も時間のかかるものでもある。日常のルーティンなやりとりだけでは育たず、適度に認知的な負荷をかけることによって伸びていく能力である。入国年齢が 8 才未満の場合(日本生まれを含む)、学齢相応になるまでに 7 年から 10 年を要する。入国年齢が 8 才以上の場合、土台となる母語の力が見込まれるため、5 年から 7 年とされる。

## 3) 目的

DLA は、最も早く伸びる会話力をてこに、伸びるのに時間を要する学習言語能力を測り、伸ばすことを目的とする。

紙筆テストでは日本語習得が十分ではない児童生徒の持つ潜在的な力を測ることができないため、対話によって潜在能力を引き出し評価する。適度な支援(足場かけ)を行うことにより、児童生徒が自力でできることと支援を得てできることの境界を見極める。

また、支援付き対話型アセスメントの形をとり、テスターが児童生徒に寄り添いながらタスクを達成することで、児童生徒の成功体験・自尊心・学習意欲の醸成を図る。

#### 4) 構造

評価参照枠と5つの評価ツール(「はじめの一步(導入会話・語彙力チェック)」、「話す」、「読む」、「書く」「聴く」)から成り、児童生徒の習得段階に応じて使用するツールを選び、実施する。ツールごとに実践ガイドと診断シート、評価参照枠が用意されている。

#### 5) 使い方

評価参照枠<全体>は、児童生徒の在籍学級参加との関係と必要な支援の段階を示したものであり、力の伸びていく段階のイメージを共有し、支援態勢を整えるために用いる。

「はじめの一步」は、DLA を実施するために必要な情報を収集し、児童生徒が最大限の力を発揮できるよう、テスターとの信頼関係を築くために用いる。十分な対話ができない児童はこの先に進むことはできないため、語彙力チェックまでで終了する。対話力があると判断できた場合は「話す」へ進む。

「話す」は、「基礎タスク」「対話タスク」「認知タスク」の3種のカードを用い、それぞれ、基礎的な文型や語彙を使って応答する力、対話をリードする力、自分の考えや意見をまとめて述べる認知面の力、という3面を測る。

「読む」は、子どもとともに1冊の本を選び、いっしょに読んで話し合うことを通して、「読解力」「読書・音読行動」「読書の習慣・興味・関心」を合わせた総合的な「読書力」を測る。

「書く」は、与えられたもしくは自分で選んだ課題で作文を書く様子を観察し、書く前の対話・書いた後の対話を通して、推敲ができるかなどの取組み姿勢を含め、まとまった文を書く力を測る。

「聴く」は、DVDの視聴と話し合いを通して、教科学習に参加するのに必要な、まとまった談話を聴く力を測る。

どのアセスメントも必ず、タスクの達成をほめて終わり、児童生徒の学習動機を高める。

実施後に、技能別の評価参照枠によってステージ判定を行う。児童生徒の能力は評価の項目によりばらつきが見られるのが普通である。評価の低い項目があれば、それはそのまま指導の必要な項目として取り上げることができ、指導計画の作成に役立つ。

○『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA《使い方映像マニュアル》』

<http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/news/jsl-dla.html>

使い方について詳しく知りたい方はこちらをご参照ください。